

言頭卷

理論と實際

大熊 信 行

「理論と實際」といふ言葉は、日本では、理論と實際とは違ふといふ意味に使はれるのが普通のやうである。しかしこの言葉は理論とその應用といふ意味にも取られるとおもふ。

理論的にいふとさうなるが實際はさういかぬといふ場合があるとすれば、それは問題が幾つかの理論の交錯した場合であるといふことだと思はれる。そのことに氣付かずに、一つの理論で割り切れぬ事柄に出逢ふと、もう理論は役に立たぬと考へるのは、理論といふものの性質を知らぬことであり、事物そのものの性質をも知らぬことである。

理論の價值が疑はれる理由はしかし他にがある。理論と稱するものの中には、初めから目的を誤つたものや、かりに目的は正しくとも、推理を誤つたものがあり、——さらに困つたことには、理論といふものの固有の性質を忘れて、一つの理論でもつてどんな問題でも解決できると信じる「理論家」があるからである。

今日、全体主義の名によつて呼ばれるものは、自由主義民主主義の全面的な自己否定であるがそれは近代的生产方法に内在する矛盾の發展と全く無關係のものでないと同時に、近代の諸國家および諸民族の地域的存在形式に内在する世界的矛盾の發展と無關係のものではない。後者を見て前者を見ず、前者を見て後者を見ないのは、いづれも悪しき抽象理論であらう。